

瀋陽駐在員事務所



「冬の風物詩？」

本日の最高気温マイナス5度、最低気温マイナス10度、俗に言う「真冬日」である。瀋陽では、この「真冬日」が3月まで続く。今はまだ暖かいほうで、最高気温がマイナス10度以下は当たり前となる。あまりに寒いので、建築現場は「冬休み」にはいる。寒すぎて仕事にならないのである。しかし、「造る」ほうはお休みでも、「壊す」ほうは冬が本番だ。この時期、市内のいたるところで、大型重機が古いアパートを砕いていく姿をみることができる。退去が済んだ建物には「征収」の文字が書かれる。瀋陽の目抜き通り「青年大街」の両側に残った古いアパートは、この冬中に全て姿を消すことになる。そして、マンション、ショッピングセンター、ホテルがそれらに取って代わる。この街の建築ラッシュは、留まる場所を知らない。

正司 毅

(財)日中経済協会北京事務所 札幌経済交流室

サンタクロースから見る中国



クリスマスが近づいてきました。我が日本では宗教に関係なくこの日を祝います。皆さんが子供の時には25日の朝にはなぜか自分の欲しいものが枕元に置いてある、そんな経験もおありかと思えます(そういう経験の無い方はすみません)。「サンタさん、本当に来たんだ」と喜んだものです。

ここ中国でも年々クリスマスが盛り上がり来ています。当事務所は北京のメインストリート長安街に面しているのですが、この通りには百貨店や5つ星ホテルが立ち並んでおり、店やホテルの中はクリスマスモード一色、ホテルの前には大きなクリスマスツリーが並んでいます。北京に来た当初は中国にクリスマス、引いては西洋の文化がそんなに根付いているとは思わず違和感を感じましたが、今では年々変わり行く街の姿を驚くと共に楽しんでます。クリスマスは10年くらい前から、ハロウィンはこちら5年くらい、バレンタインも10数年くらい前から盛り上がり来てそう、経済発展と共にイベントや文化も外国からどんどんと吸収しています。

という事で当事務所のスタッフに「子供の頃家にサンタクロースは来たか？」と質問したところ「来なかった」という回答が帰ってきました。「では自分が親になったら、子供に対してサンタクロースの役目をするか？」と更に聞いたところ、「サンタになると思う」と口を揃えて言ってくれました。

何気ない会話ではありますが、ここに今の中国が劇的な変化を遂げているその一面が潜んでいる様に感じます。日本はバブル崩壊以降モノの考え方や価値観に多少の変化はあれど、物質的なもの以外に大きな変化はない様に思います。しかし、中国では今人々の内面も刻一刻と変わり始めており、10代、20代、30代、40代、50代以降がそれぞれ大きく異なるのです。

そういった意味では「中国はこうだ」と一口で語るには、現代の中国は余りに大きく、深く、速く、複雑で一つの切り口・価値観で見ているはいけなく日々自戒する毎日です。

中島 康成

ユジノサハリンスク駐在員事務所



意気投合

初めての海外赴任で・・・PARTVI

前回に引き続き、日本とロシアに於ける仕事上のマナーの違いについて「その2」話をお話します。

【アポイントについて (その2)】

ロシア企業とのアポイントは我々にとって重要な業務の一つです。実は、そのアポイントが非常に厄介なのです。日本の場合、例えば、支店長：「社長ちょっと今日、お時間ありますか？」社長：「どうぞ、大丈夫ですよ」と電話一本で面談が成立します。仮に、秘書を通す場合も社長本人との電話で事が済みます。

ところがロシアの場合は、どんなに親しくなっても必ず面談依頼文（写真）を書いてくれと言われます。おまけに「会う目的は何か？」と必ず聞かれます。当然、目的があるから会うわけですが、例えば、日本企業との商談（ビジネスマッチング）等についてなど、目的が明確な場合は問題ありません。ところが、折り入ってお願いしたい事や会って内々に情報を貰いたい時もあります。こんな時、最初に目的を話したら、全くしらけてしまい、非常に困ると言うかやり辛いです。でも、これがロシアの慣習と言うなら慣れて行くしか無いでしょう。

しかし、最初に目的を聞くルールは無駄な面談時間を排除する意味で、非常に効率的なやり方かも知れません。ロシアには、日本でよく使う“表敬訪問”と言う面談はありません。ここは我々も少しロシアに学ばなければならぬかも知れません。

三上 訓人